



“馬鹿だめし”の白い断崖

修験道の行場—馬鹿だめし—

横倉山の三角点(774.3m)から尾根伝いに「四国のみち」を西へ約600m行った所に、“馬鹿だめし”と呼ばれる日本最古の4億年前のシルル紀の石灰岩から成る断崖がある。高さ約80mの目も眩むような絶壁で、普通の者では正気でその先端まで行って下を覗き込むことはできず、あえて危険を冒してまで近づこうとする者は“馬鹿者”であると言われ、「馬鹿か否かを試す」という意味から、そう呼ばれる。断崖の付け根には、「平家穴」と呼ばれる小規模な洞窟があり、かつて、この山に落ち延びてきた安徳天皇と平家一門が、源氏の追っ手が攻めて来た時、一時的にここに身を潜めた避難所と言われており、正面からは入口が見えず、見づかりにくくなっている。ここから崖はほぼ垂直に延び、途中でオーバーハングしており、以前はロッククライミングの練習によく利用され、今でも所々にハーケンが残されたままになっている。崖の中腹の横穴「岩屋神社」からは、「保安3(1122)年」の年号の刻まれた四国最古の経筒(銅板製)〔4口の内の一〕・剣が出土しており、かつての横倉山

修験道の行場であったことがわかる。800年以上もの昔、修験者もこの崖の上に立って法螺貝を吹いたり、捨身行を行ったのかもしれない。

崖の頂上には、安徳天皇を祭神とする横倉宮がある。正治2(1200)年8月8日、御年23歳でお亡くなりになられた安徳天皇を、平知盛が玉室大明神と崇め祭祀したと伝えられ、昔は、ここを「玉室の嶽」といった。安徳天皇陵墓参考地はここから直線距離にして約300m、歩いて5分ほどの鞠ヶ奈呂の地にあり、地元では「鞠ヶ奈呂陵墓参考地」と呼んでいる。横倉宮は、元々は横倉山修験道の上ノ宮に当り、社は横倉大権現を経て明治元年(1868)に御嶽神社、昭和24年(1949)に横倉宮と改称された。

横倉宮裏の石灰岩地には、牧野富太郎博士の発見・命名による「横倉山タイプ植物」の一つであるイワシデが、また、社殿北側の脇には、やはり、横倉山タイプ植物で、しかも、その中で唯一これをもって博士が命名したとされる価値あるヨコグラノキの老木(基準木)が今も残っている。

牧野富太郎の尊敬した寺田寅彦と“月見石”

安井 敏夫

寺田寅彦、牧野富太郎と言えば、高知県が生んだ^①偉大な地球物理学者、植物学者であるが、二人に関しておもしろい逸話がある。それは、同じ高知県出身の動物学(魚類類)の大家・田中茂徳博士がかつて東京の私電の中で、寺田寅彦博士と同車した際、たまたま土佐出身の人物の話になり、田中博士が「時に寺田さん、貴方は土佐出身者で誰が一番偉いと思いますか」と尋ねたところ、寺田博士はすぐさま、「牧野富太郎」と答えたと言う。後日、田中博士が牧野博士に会った時、同じ質問をしたところ、牧野博士は直ちに「寺田寅彦」と答えたと言われている。

このことを裏付ける証拠に、現在高知城にほど近い高知市小津町にある「寺田寅彦記念館」(旧寺田邸・高知市)の正面門の横には、牧野富太郎博士の書による「寺田寅彦先生邸跡」の御影石(花崗岩)製の記念碑〔60×123^②、昭和28年建立〕があり、さらにその下に、寺田寅彦の名言「天災は忘れられたる頃来る」を刻んだ、小さなやはり御影石製のプレート〔14.5×47.5^③〕がはめ込まれている(写真2)。一般には、「天災は忘れられたる頃やってくる」が通用しているが、ここのものは若干違って、「来る」ではなく「来る」と読むようで、全体として七五調になっており、従って、これも牧野博士の書によるものではないかと考えられている。確かに、

牧野博士はよく色紙などに、七五調の句を詠んでいる。残念ながら、お互いがどういう点が尊敬に値するののかについては明言していないが、いずれにしても、郷土を代表する二人の著名な学者が互いに尊敬の念を抱いていたことは同郷の者として大変喜ばしいことである。

ところで、旧寺田邸の庭には、実にいろんな種類の庭石が使用されていることがわかる。池はなく、なだらかな築山とそれを縫うように配置された飛石の間に一部玉砂利を敷き詰めた格好になっており、石灯籠が7基ある。つくばいが二ヶ所あり、一ヶ所は茶室の前で、手水鉢は自然のままの珪質岩、もう一ヶ所は主屋西端の小間の前で、手水鉢は加工を施した砂岩で石灯籠(花崗岩製)が附随しており、両者は対照的である。飛石には、珪質岩(一部チャート)・砂岩・頁岩(秩父累帯)、緑色片岩(“青石”)〔三波川帯〕、花崗岩(自然石と四角く板状に加工されたもの)などが用いられ、その中には高知市北方の三谷地区産の「三谷石」^④が使われているという。二つある手水鉢のうち、一つは楕円形に加工した花崗岩製のもので、あと一つは蜂の巣状に穴の空いた自然石に水を溜める穴をくり貫いたもので、こちらの方は、恐らく足摺地方もしくは近場の春野町甲殿^⑤のどこかの海岸線の波蝕による砂岩〔四万十帯〕と思われる。



〔写真1〕寺田寅彦邸の庭と“月見石”(右寄り中程とアップ)

庭石の中で一際目に付くのが、表の間縁側の前を横切る飛び石の一つで、丁度杓脱石の正面に配置された“月見石”である〔写真1〕。1.0×1.2位ほどの平たい砂岩製の自然石で、中程に長径：28cmほどの穴が空いている。陸軍の軍人で茶人でもあった寅彦の父・寺田利正氏が、そこに水を溜めて水鏡とし、夜空の月を映して月見をするためにこの場所に置いたと言われる実に風流な石である。よくお寺や茶室の庭などにも同じ用途のものがあるようであるが、普通一般には、月を観るために座る置石を月見石と呼び、度々熊野詣をした後鳥羽上皇が、宿場町・湯浅での宿・深専寺で東の空に上がる名月を観たという「月見石」が残っているようである。寺田邸にある“月見石”は、縁側に腰かけて観た場合伏角〔約17°〕が小さすぎるので、水鏡に映った月を近くで座って覗き込んで観たのかもしれない。昼間は季節によっては、よくキジバトやスズメが水浴びをしているほほえましい光景を見かける。余談ではあるが、この風流な庭石をヒントに、筆者も我が家の小さな池の水面に十六夜の月を映して池の中のもう一つの月を楽しんだことがあったが、なかなか趣きがあったいいものである。果たして、寺田博士はどういう面持ちでこの“月見石”を見たことであろうか。通常あまり人々が気に留めないようないろんなささいなことや現象を注視し、そこから思いがけない新たな発想・理論を展開し、物事の本質・法則性を科学的に実証・解明するのを得意とした博士であったので、単に風流というだけでなく、きっと科学的な見方をしたに違いない。ただ、目下の所、これに関しては、寅彦の随筆・「庭の追憶」^{※1}の中に、「……この石^{※2}の中ほどにたしか少しくぼんだところがあって、それによく雨水や打ち水がたまって空の光を照り返していたような記憶がある。しかし、ことによるとそれは、この石の隣にある片麻岩の飛び石だったのかもしれない。それほどに



〔写真2〕 牧野富太郎直筆の記念碑碑文

もう自分の記憶がうすれているのはわびしいことである。」という記述があるのみである。ここで、寅彦の言う“この石”とは、長方形の飛び石（花崗岩製）で、元どこかの石橋に使ってあったものを、寅彦の父が掘り出して来て、この位置に据えたものであるという。実際この飛び石には“くぼみ”はなく、あるのは、すぐその上（南側）の砂岩製の飛び石（先述）である。ちなみに、寅彦の言う“片麻岩”製の飛び石はその周辺にはなく、少なくとも現在の庭園内には見当たらない。

ともあれ、日本人の自然を身近に取り込み、それをうまく活かした風流心には大変感動的なものがあって実におもしろい。

- ※1 寺田寅彦は、生まれは明治11(1878)年東京市麹町区(現東京都千代田区)で、明治15(1882)年に寺田家の郷里・高知市大川新小津の家(現寺田寅彦記念館)に移っている。
- ※2 三谷地区は、高知市北方の“北山”(高知市では珍しい別荘地)の南麓にあって、黒瀬川帯の蛇紋岩の間に挟まれた地域で、チャート・珪質岩が多い。同地区にある谷・干城(土佐藩士で、西南戦争で熊本城を死守した熊本鎮台司令長官、のち島商大正)の別荘跡の石垣もほとんどがこれであり、庭石としてよく使われるこの種の石を指すものと推測されるが、定かでない。
- ※3 植物研究者・恒石直和氏(高知市子ども科学図書館館長)の御教示による。
- ※4 寅彦が、東京上野で開張された国産品に出品されていた、洋画家・藤田太郎(高知県香美郡山北村(現香我美町))の描いた「秋庭」を観賞し、昔の我が家の庭を回想しながら書いた随筆(昭和9年)。これがここで言う“月見石”のことと思われるが、随筆の中に度々出て来る想い出のある「長方形の花崗岩の飛び石」ではなく、穴の空いた飛び石は明らかに砂岩で、このすぐ斜め後に位置するやはり、寅彦の記憶違いであろう。40年ほど昔の少年の頃のことなので無理もない。

(やすいとしお/横倉山自然の森博物館副館長兼学芸員)

横倉山ミニ歳時記

■ヤマホオズキ *Physalis chamaesarachoides* Makino

山地の谷間に生えるやや稀なナス科の多年草で、属名は、“水泡”に由来し、ふくらんだに萼に基づく。

萼は緑色で、果時には長さ12~15mmの先のつぼんだホオズキのような袋状になり、刺状の突起がまばらにあり、10本の黒紫色の絨がある。

高知県出身の植物学者・故山中二男(高知大学名誉教授)によって昭和40年にまとめられた県内の植物報告書の中に、堂ガ森(西土佐村)と横倉山の二ヶ所しか自生が確認されていなかった。4年前から始まった「高知植物誌」編纂のための県内全域の植物調査の経過の中で、昨年11月3日(文化の日)に、植物研究者・大倉浩典氏によって約40年ぶりに横倉山でその存在が再確認された。牧野富太郎博士によって発見・命名された25種の横倉山タイプ植物の中には、ヨコグラブドウやミドリワラビのようにすでに横倉山では絶滅したと考えられるものもあるが、今回のような“発見”もまだあるようである。



“学校坂道” —子どもたちの思い出のみち—

安井 敏夫

「学校坂道」、何か映画かドラマのタイトルのようであるが、それは、高知県越知町黒石小学校の児童(全校児童：7名)の通学路の愛称である。

清流・仁淀川にほど近い麓の越知町鎌井田地区から朝7時15分に集合して、全員で山の上にある学校までの山道を歩いて通う通学路である。歩いて約50分の道のりである。夏の暑い日も、冬の本枯らしの吹く寒い日も、また、雨の日も、いつもみんなと一緒に学校まで通う。道中には、いろんな“出会い”がある。きれいな花やキノコ、可愛い小鳥とそのさえずり、……。そんな自然いっぱいの中、子どもたちは、みんなで楽しく、自然からいろんなことを学びながら遠い道のりを通う。時には毒ヘビのママシに出会うこともあり、そういう場合は上級の6年生が退治してくれるそうである。

昨年の7月に須崎市で行われた「高岡教育総合フェスタ」の発表会では、「学校坂道」というテーマで、子どもたち一人一人が交代で、自分たちで作ったイラスト・写真入りのマップとスライドを使って説明しながら、道中で見られるいろんな自然を語ってくれた。その話の中で、高齢化と少子化の波で、本年度限りで学校が閉鎖されることを聞き、もうこれからは思い出の“学校坂道”を通して子どもたちが学校へ行く姿を見ることもないのかと、おもわず涙ぐんでしまったことであった。「是非一度子どもたちと一緒に学校坂道を登ってみたい」、そんな強い思いで昨年の11月9日、休みをとって登ってみるようになった。

朝7時15分に麓の鎌井田集落の簡易郵便局前に集合し、全員で登り始める。途中2ヶ所に、子どもたちに時間を知らせるための時計が設置してある。子どもたちは、それを見て時間を調整しながら、遅れることなく学校に通う。30分余登った所で視界が開け、後を振り返ると、眼下に清流・仁淀川と浅尾の沈下橋が見えた〔写真1〕。もう随分と高い所まで歩いてきたことがわかる。



〔写真1〕眼下に清流・仁淀川を望む“学校坂道”

途中、道の真ん中にあるタヌキの“溜め糞”や変わったキノコを見ながら、予定の時刻の8時10分に

学校に着いた。教室に荷物を置いたかと思ったら、すぐに“5分完走”が始まり、みんなで校長先生と一緒に一周80mの校庭のグラウンドを全力で走る。その後校舎に戻って全員うがいと手を洗って授業に入る。教室は、6年生(3名)と5年生(1名)のクラスと4年生(2名)と1年生(1名)の2クラスに分かれ、2人の女性の先生によって行われる。つまり、先生は、2つの学年を同時に担任することになるが、実にスムーズに何の抵抗もなく授業は進んでいく。これには感心した。学校には、あと校長先生と調理員がいるだけである。国語と算数の授業をそれぞれ一緒に聞かせてもらったが、朗読も上手だし、算数の計算もお手の物だ。それに、何よりもみんな毛筆と図画が上手なのは驚かされた。やはり、先生の指導の仕方が徹底しているからなのだろうか。感心させられる。

3時間目の理科の授業は、子どもたち全員を対象に、持参した化石と資料を元に、越知町のシンボルである横倉山とその生い立ちについて私の方でやらせてもらった。やはり、子どもたちに、自分たちの郷里にある横倉山のすばらしさと偉大さを知ってもらいたかったからである。授業が終わって、子どもたち一人一人に横倉山の日本最古の化石と私からのささやかなお土産をプレゼントして今日の思い出にしてもらった。

12時20分からは、調理員さんの心のこもった暖かい昼食をみんなでそろって一緒に頂く。食べる前に、「いただきます」の合掌と、子どもから献立の内容とおかずの説明もあった。すべてにおいて、充実していて、しかも、実に暖かい“家庭的”な雰囲気に満ちている。

昼食が終わると、ゆっくり休むこともなく校庭で、全員でサッカー遊びが始まった。6年生はさすがに替うまい。女の子も負けてはいない。私も仲間に入れてもらったが、日頃の運動不足のせいか、疾走はきつい。昼休みが終わると、今度は全員が分担して一斉清掃の時間に入る。

午後の授業は、11月20日(日)に行われる、黒石小学習交流会「いしっ子まつり」の出し物の準備を行う。1・4年生は、劇「おしゃべりなたまごやき」で使うグッズの制作、5・6年生は、狂言「太郎冠者」の練習。今回が最後で、みんな一生懸命取り組んでいた。

私は、当初途中で帰る予定であったが、結局最後まで授業を見学させてもらい、また、子どもたちと一緒に“学校坂道”を通して下校することになった〔写真2〕。最後に、子どもたちに、これまでの学校生活の楽し

思い出を聞かせてもらった。

「通学路でキノコをつつのが楽しい」「ヒツキムシ(植物の種子)で遊ぶのが楽しい」「10月に休校記念で九州の別府に行き、サファリパークや「うみたまご」水族館でアシカショーを見たことがたのしかった」そうである。

今日一日、子どもたちと一緒に学校生活を体験できたことは、私にとって本当に勉強になったし、楽しい思い出になった……。思い出を有難う。

みんなで一緒に通った思い出いっぱいの「学校坂道」。学校が休校になっても、また、大きくなっても、いつまでも大切な思い出として心の中にしまっておいてほしいものである。できれば、近い将来、再び次の世代の元気な子どもたちの通う姿、校庭ではしゃぐ姿が見られるようになる日が来ることを願いたい。

子どもたちがいつも口ずさんでいる、黒石小学校にふさわしい歌[※]があるので最後に紹介したい。



(写真2)黒石小学校正面玄関にて全員そろって

学校坂道

作詞・作曲/西口よう子 黒石小学校編

1. この坂道上ったら ほくの学校があります
上の林道 下には川が 真っ青に見えます
青空に抱かれた ほくの自慢の学校
この坂道を ほくは毎朝 風をきってかけます
2. この坂道下りるのは 空が赤く燃えるころ
丘をわたる 澄んだ空気 後ろに長い影
友だちの笑顔も 夕焼けに染まります
この坂道を ほくは明日も口笛と上ります

※「第1回NHK子どもの歌コンテスト」(昭和58年)入賞曲「学校坂道」の一部(1.の2行目)を「上の林道 下には川が」に編詩

博物館ニュース

「みんなで調べた越知町の哺乳動物」

2005年4月～2006年3月【独立行政法人科学技術振興機構(JST)の支援事業】

越知中学校の総合学習の一環として、NPO法人・四国自然史科学研究センターの協力のもと、横倉山自然の森博物館と合同で、町内に生息する哺乳動物について、無人カメラ、トラップ、果箱の設置等により、生息調査を行っている。この種の本格的な調査は町内では初めてで、普段あまり目撃例のないキツネ・サル・ニホンジカなどの哺乳動物も確認され、大きな成果があがっている。調査結果は、3月に生徒たちがまとめ、企画展として博物館で発表する。



企画展:「土佐のカエル」[2005年7月23日(土)～9月4日(日)]
(協力:四国自然史科学研究センター)

身近な生きものである「カエル」を通して、その分布・種類及び個体数等から、それらが何を意味するかについて考える一つのきっかけとする。

主な内容は、「カエルとは?」「越知町のカエル」「カエルと生きもののかかわり」「カエルと人のかかわり」「カエル



の危機」「カエルを守るために私たちにできること」などで、珍しいカエルやオタマジャクシの化石の展示の他、県内で生息が確認されている実際に生きたカエル11種を水槽で飼育し、その姿・色彩・生態を観察してもらい、パソコン操作で鳴き声を聞けるよう手法を凝らした。カエルが食べる昆虫標本やカエルを食べる動物の剥製を展示し、食物連鎖について考えてもらった。また、人とカエルがどのようなかかわりをもって生きてきたかについて、県内産出の日本最古の弥生時代のカエルの描かれた銅剣を始め、いろんな身近な事例・資料を使って、生態系におけるカエルの位置付け、役割等の「カエルの存在意義」について考えてみた。この他、カエルを題材にしたいろんなグッズも同時に展示し、人間生活とのかかわりの深さや親しみを味わってもらった。

企画展:「ワイルドライフ・アート展 Part II」～大自然と野生動物との融合～

[2005年10月1日(土)～11月6日(日)]

大自然の中に生息するワイルドライフ(野生生物)の生態を、周りの自然と共に、正確かつ芸術的に描く細密画「ワ



イルドライブ・アート』の作品を通して、野生動物の自然のままの姿・生態はもちろん、それらが生息する、できる自然の尊さと環境保護の重要性・必要性について考える機会とした。

今回は、2000年に続く第2弾で、日本では数少ないワイルドドライブアーティストの第一人者・岡本正尹（大阪府枚方市）の作品のうち、森に生息する野生動物を対象とした「森シリーズ」の迫力ある初公開の作品約30点を展示。

繊細な描写はどれも写真と見誤るほどで、驚異的で観る者を圧倒し、大自然の織り成す感動の世界へと誘う。

企画展：「旅のスケッチとだるま太陽写真～川添晃・公文正昭 二人展～」

〔2005年12月23日（金・祝）～2006年1月22日（日）〕

芸西天文学習館の講師を務める川添晃氏（高知県南国市）の「旅の記録」である風景画約30点と、水平線上に「だるま形」に浮かぶ「だるま太陽」に魅せられた公文正昭氏（同安芸郡田野町）が、その美を追い続けて撮影した写真約30点を展示。

川添氏の、天体観測を含め北海道から沖縄まで全国の旅先での風景を感動に表現した思い出のこもった水彩画―「スケッチには夢がある」と、公文氏の、1年で最も寒さの厳しい冬場に「朝な、夕な」に何度もチャレンジした執念の現れと自然現象の美しさが人々の感動を呼んだ。



夏休み博物館教室 （化石）

2005年7月31日（日）〔安井敏夫（横倉山自然の森博物館学芸員）、参加者：小・中学生20名（幼児1）、大人16名〕

昨年に引き続き佐川町川内ヶ谷の新しく建設された林道沿いで中生代三畳紀の示準化石「モノチス」の化石の採集を行う。

昨年は大型のモノチス〔*Monotis (Entomonotus) zabaikalica*〕が容易に大量に採集できたが、今回は一回り小さい種類のもの〔*Monotis (Entomonotus) jochotuis*〕を丹念に地層を剥がしながらの採集となったが、結果的に骨結構採集でき夏休みのいい思い出になったようだ。

最後に、「化石からわかること」、「化石採集のルールとマナー」（採集する前に地主に許可を得る、行き過ぎた採集は避ける、必要以上に採集しない、化石は骨のもの、後

片付けをする等）を皆に伝え無事閉会した。

いつも問題になることであるが、道路や崖を著しく破壊する行き過ぎた採集により土地の所有者に迷惑をかけ、挙げ句の果てに採集禁止になってしまうといったケースが多く、そんなことにならないよう、ルールとマナーをきちっと守ってみんなで楽しく科学する行動・心を養って欲しいものである。



〔植物〕

2005年8月6日（土）〔講師：恒石直和（高知市子ども科学図書館館長）、参加者：小・中学生18名（幼児3）、大人7名〕

先ず博物館の3階展望ロビーで、顕微鏡による植物の観察（カノコユリの花粉・ツクサの気孔）、植物（ダイコン）を使った「ダイコン電池」の作製など植物に関するいろいろな簡単な科学実験を行う。特に、輪切りにしたダイコンの切り口に銅板と亜鉛板を刺し、それを5個並べてそれぞれを電線で直列につなぎ、豆電球を点灯させたり、発光ダイオードを接続して可愛いメロディーを流すなど、楽しく学習できた。

次に、戸外に出て博物館の周りの植物の観察・勉強をしたり、木の葉を使った「草笛」、カキの葉を使った「矢飛び」などの植物を使った遊びも行う。

クスノキは高知県の街路樹や学校の庭木にも多いが、これから採るナフタリンは良質の駆虫剤で、和服の保存にはこれが最も良く、虫に食われないことから仏像の彫刻にも用いられている。

今年もいろいろな実験や観察でみんな一様に興味を示した。



〔昆虫〕

2005年8月7日（日）〔講師：高橋厚彦（高知市子ども科学図書館指導員）、参加者：小・中学生18名（幼児3）、大人15名〕

今回も、昨年と同様、清流仁淀川の支流・坂折川の水
生昆虫について調べる。

あらかじめ水生昆虫の特徴・分類・名前を学習した後、
網を用いて膝まで水に浸かり石をはくって水生昆虫を採集
した。水生昆虫は、尾や足のつめの数、形態から大きく、
1. カゲロウ、2. カワゲラ、3. トビケラ、4. その他 の4
グループに分かれ、今回坂折川では、カゲロウ類を筆頭に、
カワゲラ類、トビケラ類(ナガレトビケラ・ヤマトトビケラ)、
ヘビトンボ類、サワガニなどの水質階級の「きれいな水」を
示す指標生物が採集され、上流では「清流のパロメーター」
オオサンショウウオ〔国の特別天然記念物〕が棲む坂折川
が下流部の仁淀川との合流付近でも「きれいな」川である
ことが水生昆虫を通じて理解できた。



【工作教室】（“オリジナル万華鏡”作り）

2005年8月14日（日）【講師：村田国鶴、橋本 優（日本リサイ
クル万華鏡協会）、参加者：小学生 20名、大人 16名】

大阪の福祉作業所の子どもたちの作った材料部品（塩ビ
ミラー・紙の筒・カレットなど）を用いて、順次組み立て
ていく。筒に各自好きないろんな柄のシール（または包装
紙など）を貼り、試験管の中に色とりどりのカレット（ビ
ーズなど）を入れ、水と洗濯用の石けん水を等量注入して
キャップをする。試験管を逆さにすると、中のカレットが
ゆっくり落下し次々にいろんな模様に変化していく。カレ
ットの色・大きさ・量の違いでじつにさまざまな模様がで
き、正に“オリジナル”な万華鏡を楽しむことができた。万華
鏡には、この他、水の結晶・夜空の星座を見ているような
夢のあるものもある。

友の会だより

【熊野三山視察研修旅行】

2005年10月22日（土）～23日（日）【参加者：20名（内事務局・
博物館職員、3名）】

本年度の友の会の1泊2日の視察研修は、「紀伊山地の霊
場と参詣道」（世界遺産）のうち、横倉山修験道と関係のあ
る和歌山県の「熊野三山」と「熊野古道」に行く。

「熊野三山」とは、「吉野・大峰」、「高野山」と並ぶ山岳信
仰の霊場の一つで、熊野本宮大社、熊野速玉大社、熊野那
智大社の三社を指し、「熊野古道」はこれらの霊場及び三社
を結ぶ参詣道である。いつものようにQ&Aで「事前学習」
をやりながらバスで目的地に向かう。

初日は、熊野の霊域の入口とされていた「滝尻王子^{（たきしりおうじ）}」を
皮切りに、熊野古道の「中辺路」^{（なかつちみち）}を通過して「熊野本宮大社」に



行く。最後は、「熊野速玉大社」へ足を運び、
境内にある「神宝館」を見学する。ここには、
14世紀の終わりに当時の
天皇・上皇・室町将
軍らによって奉納され
た工芸技術の粋を集め
た約1000点もの古神宝
類〔国宝〕が伝えられ
ている。

二日目は、熊野三山
最終の目的地である熊

野那智大社への表参道「大門坂」を登る。参道入口付近にあ
る樹齢800年の夫婦杉に始まり、幅2m余り、全長700m、
267段の歴史ある古い石段（“古道”）が続く。石段を登り詰
めた所が、熊野九十九王子最終の王子社・多富気王子で、
かつてこの道を上皇や貴族たちが参詣のために頻繁に通
ったことを想像しながら登ると大変ロマンがある。熊野三山
最後の那智大社と日本屈指の大滝で、古くから信仰の対象
とされてきた「那智の滝」（落差：133m）を見学し帰路に
就く。

※熊野三山の本社の本社（王子社）が置かれた所で、熊野九十九王子の
中でも格の高い五体王子の一つ。かつて上皇、貴族達は王子社を遠
拝しながら熊野へ向かった。

【炭窯づくり】

10月～12月にかけて、昔ながらの「炭窯」づくりを行った。



越知町五味地区(市山集落)の友の会メンバーの所有する休耕田を利用させてもらい、実際に炭焼きの経験のある地元住民の指導の元に忠実に再現した本格的な炭窯づくりである。

直径：2m、高さ：1.3mほどの窯の本体を赤土で器頭状に盛って木の板で叩いて固め、周りを石のブロックで囲う。カシ、クスギ、ナラなどの生木を窯に立てて並べ3日間焼き、3～4日蒸し焼きにした後窯を開け、炭を取り出す。かつては、横倉山の至る所で炭が焼かれていて、現在でも時々炭窯の跡を見かけることがあるが、随分と山の奥深く高い場所にあったりして、昔の人々の苦勞の跡が偲ばれる。

最近では、一般の家庭ではほとんど炭は使わないが、こういう昔ながらの炭窯で作った炭で餅を焼いたり、いろりを囲んで魚でも焼きながら談義するのもいいものである。子どもたちがそういう貴重な体験のできるよう友の会でも整備をすすめていきたい。

【クリスマスリース教室】

2005年12月18日(土)【講師：菅谷美恵子・小田春香氏(友の会会員)、参加者：28名(博物館展望ロビー)】



毎年恒例の人気の高い教室の1つ。今年は、材料のヒカゲノカズラ・ナンキンハゼ・サルトリイバラなど材料はほぼ例年通りであるが、趣向を変えて、リース本体のかずらの代りにさまざまな形をした杉板を土台にし、壁掛けやテーブルに置くタイプのものを作った。

【スターウォッチング】

2006年1月22日(日)【講師：片岡重敏(博物館館長)、参加者：17名】

博物館3階展望ロビーにおいて、双眼鏡を使って、天の川とその中にある「すばる(プレアデス星団)」と、土星を観察。天の川が肉眼で確認できるか否かで光害の程度がわかり、今回の観察会は、環境省と(財)日本環境協会が主催する、「全国星空継続観察事業」の一環として行われた。

【平成17年度博物館行事】

- 4月29日(金・祝)～5月29日(日)
企画展：「にしみわくみ 染色展」
- 7月24日(土)～8月4日(日)
企画展：「土佐のカエル」【協力：NPO法人 西国自然史科学研究所センター】
- 7月31日(日) 夏休み博物館教室【化石】
- 8月6日(土) 夏休み博物館教室【植物】
- 8月7日(日) 夏休み博物館教室【昆虫】
- 8月14日(日) 夏休み親子工作教室【万華鏡作り】
- 10月1日(土)～11月6日(日)
企画展：「ワイルドライフアート展-Part II-」
- 12月11日(日) 博物館協議会

- 12月23日(金・祝)～1月22日(日)
企画展：「鏡のスケッチとどるま太陽写真 一川流見・公文正昭 二人展」
- 3月11日(土)～5月14日(日)
企画展：「みんなで調べた越知町の哺乳動物」

【博物館友の会「フォレストクラブ」の平成17年度の活動】

- 1月23日(土) エボシ岩のアケボノツツジ観察会
- 4月30日(土) 草木染め教室
- 5月4日(水・祝) 豆蔵一博物館3階展望ロビー
- 5月21日(土) 友の会運営委員会
- 5月22日(日) 横倉山野鳥観察会(雨天のため中止)
- 5月29日(日) 友の会総会

- 6月18日(土) ヒメゴタル観察会一杉原神社一
- 6月19日(日) 中津明神植物観察会
- 7月23日(土) ムササビ・コチンダコウモリ観察会一杉原神社(山小屋キャンプ)一
- 9月19日(月・日) 秋の横倉山とお月見
- 10月～12月 明るい山づくり一展望をつくらう一【高知県森と緑の会公募事業】
- 10月22日(土)、23日(日) 1泊2日 猪野三山(和歌山県・世界遺産)視察研修会
- 12月17日(土) クリスマスリース教室
- 2006年1月1日(日) 耕田の鳥を横倉山で
- 1月22日(日) スターウォッチング
- 2月18日(土) いろいろな炭をつくってみよう一炭焼体験一

スタッフの声、声、声

【片岡】 友の会では、冬の全国星空継続観察(スターウォッチングネットワーク)に参加し、博物館屋上で寒空に震えるながら昔の天の川やスバルを観望しました。私自身の感覚では、越知の空も最近次第に明るくなり暗い星が見えなくなっています。きれいな星空を失いたくない! 私の願いです。

【西川】 博物館に間わり横倉山に登ることが多くなりました。四季それぞれに色を変える自然と、変わらずにいる自然のすばらしさを実感しています。山を通じての人のふれ合いも楽しいひと時ですね。越知町の訪れる財産である横倉山に皆さんと一緒に登りませんか。

【安井】 昨半夏の企画展「土佐のカエル」以降カエルに親しみをもつようになったところへ、横倉山でイモリのような体色の変わったカエルを発見。新種?かも

しれないと探って帰って臨時職員に見せると、あっさり「それヒキガエルの子供です」と言われてしまった。半信半疑で「クロアケ」名付け少し飼育し様子を見ることにした。職員が毎日お弁当の残りものヤクモ虫を採ってエサを与え続けていると段々それらしくなってきて、現在冬眠中。春になって一段とたくましくなった姿を見せて欲しいものである。

【小松】 毎年今ごろには、博物館の水産にヤマアカガエルが産卵のために現れるのですが、今年はちょっと寒いのかまだ見えません。でもアセビの花の咲く3月頃にはオタマジャクシとなって元気に泳ぎまわっていることでしょうか。はーるよこい。

【黒澤】 例年は、日向で咲いている真白なノジギクの花を事務室から眺め、視覚的に暖かさを感じていましたが、この冬(昨年12月)からの厳しい寒さのせ

いで、今季のノジギクは「残雪」に見えて仕方ありませんでした。しかし、その後、本名の雪に驚かされることになるなんて一びくりでした。

【伊藤】 数年ほど前から毎年秋になるとサジョウウホトギスに会いに行きます。前年は少し時間が遅く花が終わりがかかっていたので、今年は1週間ほど早く行きました。前回花がすでに終わっていた株に花が咲いていて、写真を撮ることができました。他の株は花数が多くて綺麗でした。また来年も会いに行こうと思います。

【小野】 博物館で働き始めて半年が経ちました。昨年の12月は例年に比べ冷え込みが厳しく雪も積もり、日影になる山側はなかなか溶けませんでした。その間も事務室はシンシンと冷え込み…私のこれまでの博物館というもののイメージがガラリと変わりました。

高知県越知町立

横倉山 自然の森博物館

〒781-1303 高知県高岡郡越知町越知丙737番地12
TEL0889(26)1060 FAX0889(26)0620
http://www.town.ochikochi.jp/

- 開館時間：午前9時より午後5時まで
最終入館は午後4時30分
- 休館日：毎週月曜日(祝日の場合は翌日)
12月29日から翌年の1月3日まで
- 入館料：大人……………500円(小・中・高20名以上は100円引替)
高校・大学生……………400円
小・中学生……………200円
- 越知への交通
高知—河津港駅前—佐川—八木野駅前—越知
河津港駅前090分

